

## <巻頭言>

# 新たな時代を生きる子どもたちのために

更埴教育会長 飯 島 稔

校長室から見える桜の花が満開になったのは3月27日。4月6日には桜吹雪が新一年生の入学を祝っていた。これまでにない早さの春の訪れを歓迎する一方で、温暖化の影響を実感する新年度のスタートとなった。異常気象とか〇〇年に一度などという言葉が毎年のように聞かれるようになり、通常ではなかったことが通常になりつつある。過去の経験を基準にしたとらえ方は、もはや通用しないのかもしれない。

3年間続いたパンデミックの出口が見え始めた新学期、本校では1年生を迎える会が4年ぶりに対面で行われた。会の最後には6年生が1年生の間に入って手をつなぎ、全校でドラえもんの歌を合唱した。顔と顔を合わせ、直接交流することでしか得られない感覚、リモートでは得られない一体感等、対面の良さをあらためて感じる会となった。

今年度はコロナ以前の学校生活を取り戻していくことになる。しかし、ただ単純に前に戻すことにはならないだろう。特に学習場面では一人一台端末が導入されたことにより、学習スタイルが大きく変わりつつある。『令和の日本型学校教育』が示され、これまでの学習観からの転換が求められている。予測困難な、新たな時代を生きる子どもたちに必要な教育は何か。そのあり方を自ら求め、研究・研修する教師でありたいと思う。

雑誌「信濃教育」第1632号（令和4年11月）の特集「我が教育会の取組」に、更埴教育会が掲載されている。私も編集委員の一員として関わらせていただき、改めて我が教育会を見つめ直す機会をいただいた。社会の変化とともに教育を取り巻く環境が変化する中で、職能団体としての自覚を持ち、常に子どもを真ん中におきながらそれぞれの課題に誠実に向き合い、今日に至っている。授業改善や職能向上を目指し、人と人がつながり、互いに学び合う研修の場を提供するべく、「教育を語る会」「教育研究集会」「各種研究調査委員会」「全郡研究会」「同好会」等による諸事業を推進し修養を続けてきた。こうした研修によって得られた学びは、教師としての専門性を高めるだけでなく「同僚から同僚へ」、「先輩から後輩へ」のつながりとなって共に学び共に育つ更埴教育会の気風を培ってきた。「教育会」は、仲間たちが集い、互いに磨き合い、協力し合い、助け合いながら教育者として成長していくために、先輩方が残してくれたすばらしい財産であるといえる。

新たな時代の教育を模索する会員が、教育会の事業・研修を通して学校や世代の枠を超えてつながり合い、共に学び合うなかで自己を見返し、新たな発見や確かな学びを感じ、参加してよかった、楽しかったという思いをもち、共に高め合っていく、そんな教育会になることを願っている。